



農の暮らし ~ 自給自足社会に向けて ~ 第18回

いのちを食べて生きている私たち。私たちの生活を支えている農のこと、そして自給自足の暮らしについて、もっと身近に感じてみてください。



私の農の暮らし 中井弘和さん

高木さんの講演を聴いてから15年ほど経ちます。人類の未来に、また私自身の未来に明るい灯火が点った出会いでした。私は、農の営みを生業にしているわけではありませんが、一介の農学者として、農の暮らしに寄り添うよう心がけてきました。

稲の品種改良

週の3日は、伊豆の山間にある自然農法農場(NPO法人「MOA自然農法文化事業団」)で稲の品種改良を行っています。農薬や化学肥料を使用しない自然農法でも収量の上がる品種を作ろうとしているのです。「育種学」が専門ですが、大学在職最後の14年間は、学生たちと、長野県飯島町の自然農法農家の田んぼを借り、そこを拠点にして、自然農法に適應する稲品種育成に関する研究を行っていました。その成果を活かしながら、今の仕事を行い、6年目を迎えています。いつしか、育種は農家の手から離れ、企業や国の手に委ねられるようになってきましたが、農業を本来の姿に戻すには、種(品種)を農家自身の手に取り戻すことが大切と考えています。明治時代頃までは、稲の育種は農民自身が行っていました。今も彼らが作った優れた品種が多く残っています。実は、コシヒカリとかササニシキとか有名な品種もす

べて昔農民たちが作った品種が元なのです。品種改良は異なった品種間の交配から始まりますが、私たちは、明治時代に東西日本のそれぞれ代表といわれた「亀の尾」と「旭」という品種を交配してみました。現在は、雑種第5代になっています。4月にそのような雑種の種を播き、6月に田植えをしてからは、年中田んぼを歩き回り一つひとつの稲を見て回り、選ぶという作業を続けています。

農家の人たちとともに

北海道から沖縄まで全国15箇所ほどの地域の自然農法農家の水田を借り、彼らと一緒に品種改良の仕事を始めてから3年目になります。かねてより、農学研究は農業の現場の視点に立って行いたいと考えていましたので、ようやくその願いが叶いました。生業として常に稲と接している農家の感性は大きな力となります。また、たとえば「亀の尾」と「旭」の雑種後代を種々の地域で栽培しますと、北の地域では早生の稲が残り、南では晩生が残るといふ風にその地域の気候風土に合う稲が得られます。もちろんその上でその土地の人の選抜が加えられます。この取り組みに対する農家の人たちの生き活きた姿を見ていると日本の農業もまだまだ可能性を秘めていると思います。田植え後の6~7月と収穫期の9~11月は全国を巡って、農家の人たちとその田んぼの稲を見て回ります。

棚田再生の学びの場、清沢塾

10年前、静岡大学創立50周年記念公開講座で、自然農で知られる川口由一さんを招いて対談をした席上、受講生に声をかけて始まったのが「清沢塾」です。静岡市の清流で知られる藁科川上流域の山間の荒廃した棚田を修復し、自然農法で稲を栽培する試みを始めました。当初は3年

ばかり放置され、まだ田んぼの体をなしている 7 段分の棚田から始めました。耕さず、草を敵としないのが原則ですが、最初の年、稲は生い茂る草に負け、その上猪に全部食われてしまう失敗をしました。2 年目はその経験を生かし、田植え後は鎌で草を刈って苗の根元に置いていき、電柵で猪を防ぎ実りの秋を迎えることができました。それからは、



冬の間、上方に続く 30 年以上放置されて山林と化した棚田の開墾を重ね、24 段にまで広げてい

きました。ブッシュを払い、生い茂る竹や木を切り倒し、石垣を修復し、沢からパイプで水を引き棚田を再生して、稲を植えていったのです。隣接する杉林の間伐材で 50 人程が入れる小屋を建て、その中央には大きな囲炉裏をつくり、それを囲んでお昼には自分たちで育てたお米を食べながら話に花を咲かせます。

清沢塾のモットーは自由に、楽しく、自主的です。朝来たら田んぼの様子を見て自分で何をすべきかを判断して各自が好きなように作業をする。秋には黄金色の稲で棚田が輝くという共通のビジョンがあればよいのです。毎月 2 回の開催ですが、農繁期は毎週となります。より多くの多彩な人たちや企業、行政、ボランティアグループなどの団体が集まってきて、この 10 年間で交流の輪が大きく広がりました。小さな棚田ですが、田植えのときには子供た



ちも含めて 160 人ほども集まるようになりました。

横浜から電車で静岡駅まで来て、さらにそこから農

作業衣姿で鋤を背負い、自転車で 1 時間以上もかけて清沢塾に通ってきた女性 A さんの姿は忘れられません。今は結婚して一時の母となり静岡

県のある場所で自ら自然農を実践しています。毎回車で 4 時間をかけて通ってきた I さん夫妻は、今は、地元で農業を生業とする生活に入っています。ここでの学び方、楽しみ方はいろいろですが、農の暮らしに向かいたいという願いはみんなの心の中に根付いています。

やさしくすれば、自然は応えてくれる

自然の持つ大きな特徴のひとつは多様性です。農業生態系も多様性に富むほうがいいはずです。そこで、清沢塾では 10 以上の種々の品種を植えています。変わったところでは、江戸時代に借金が返せたほど収量が上がったという品種、「借錢切」や、昔中国の皇帝に献上されたという薬用の黒米、「神秘の米」などです。いつしか棚田には蛭が乱舞するようになりました。6 月上旬にはゲンジボタル、下旬から 7 月にかけてはヘイケボタルが田んぼのあちこちに宝石のように輝きます。トンボ、イモリ、カエル等々、生きものの種類が実に豊富になってきました。各地で天然記念物に指定されるモリアオガエルの生息地ともなっています。それに、ここ来るとみんな優しくなるのです。人は自然と共生することで、人ともよりよく共生できる、ということもここで学びました。



中井弘和

連絡先: h-nakai@mail.wbs.ne.jp

静岡大学名誉教授(元副学長)で、ネットワーク『地球村』の理事でもある中井弘和先生は、棚田で無農薬・無肥料の自然農法に取り組む「清沢塾」の塾長です。

このコーナー - に登場していただける方を募集しています。自薦他薦問いません。メールでご連絡ください。mail: tusin@chikyumura.org